

絵柄綾織紋衣（名聞名利な おしやれ着）の否定（三）

廣田 頼道

薄墨の衣は名字即の凡夫僧の姿を表わしている。
常不輕菩薩の法衣も薄墨と伝わる。

妙法弘通の為に起る、諸々の侮辱・迫害を忍受して、かつ相手を恨まない、忍辱の衣（心）は、あらゆる外障から生命（心）を守ってくれる。

金翅鳥に子竜を食われ続けた竜が、釈尊に救いを求め、釈尊は自らの袈裟を授け、その袈裟で子竜を覆った事によつて、金翅鳥は以後、子竜を食す事が出来なくなつた。その事から竜は忍辱の袈裟を掛ける修行僧を守護する諸天の一分になり、金翅鳥も諸天の一分になつたとの説話も、強大な力を持つ竜でさえも生きて行く上で忍辱の心で耐えなければならぬ事があることを示され、その事を超克する品として袈裟の存在を示し、忍辱を強調しているのです。

根本の法が本因の妙法でなければ、忍辱や薄墨は

何んの意味も無い。爾前迹門の教法を宗旨とするものが忍辱薄墨の衣を着しても、何んの為の忍辱ですかと、辻褄が合わなくなつてしまふ。日寛上人が六卷抄の「當家三衣抄」（学林版232P）に

唯當流の法衣のみ薄墨の素絹五条にして永く諸門流に異なり

とされているのは、逆から言えば當流しか赦されない、當流しか着る意義を持たない法衣が薄墨の衣ということなのであります。加えて六卷抄に、この指摘があるということは、京風権力思考に染つた要法寺の「貫主本仏思想」と、朝廷と世間に阿て華美に流れて行く法衣改竄かいざんの悪変に對して、法門を無くせば必ず姿も狂うとの警声なのであります。日永上人、日寛上人がどれほど是正しても、「貫主本仏思想」と「絵柄綾織紋衣」は残骸の様に大石寺へ居座つてしまつていたのであります。

一切衆生成仏の法を表わした忍辱の衣を「法衣」と称する。元来十界互具の凡夫の僧が、自分の地位階級を表現した名聞名利を付着させた着物は「法衣」とは言えない。凡夫僧は、「絵柄綾織紋衣」を着る事を恥と自覚しなければいけない。

日蓮正宗はもとより、日蓮宗各派の僧侶全てが、貫主や能化、重役、理事と称している者達が率先して範を垂れ、「絵柄綾織紋衣・有色の法衣・燕尾帽子等々」の「法衣」から逸脱したチンドン屋の様な示威行為を止め、脱ぎ捨て、破り捨て、但薄墨の白五条の「法衣」を着した暁に、日蓮大聖人の仏法は、暗闇をカミソリで音も無く切り裂く様に、大きな夜明けを迎え、必ず正しい意識変改が出来る事と思う。

貫主はじめ能化の人々は、家を出て「出家」し、一切衆生成仏に目標の目線を合せなければいけないのに、「出家」したはずの家へ還俗したのか、家を中心にした自分の立身出世や、家紋に象徴される一族の誉れ、繁栄に目を合せている事になる。袈裟・衣に家紋を入れるなど謗法の最たる姿であります。ましてや貫主が鶴丸の紋を入れるなど、日蓮大聖人の一切の法を貫主一人だけが所持するという「貫主本仏思想」を如実に表わしている姿であり、謗法の最々たる、生きたる証しであります。法門の裏付は微塵もありません。あるならば、この小僧を足腰立たない様に破折して頂きたい。

法門の裏付けが無い者は、必ず「先代もしていた

……」と弁解に終始するでしょうが、先代の先代の先代の先代……行き尽く先の日蓮大聖人様は、行っていないかつた事なのであります。「金口嫡嫡」、「一器の水を一器に写すが如く」と言い張り乍、何故「法衣」は日蓮大聖人様の如くではないのでしょうか。身近な先代も先代も先代も何んの問題意識もなく「法衣」に関しては名聞名利のおしゃれ着として謗法を犯していたのであります。

自分を偉く見せたい。自分の法臘・階級を誇示したい。自分を大きく見せたいという元品の無明を捨てる事は、凡夫だから出来ないことだと思ふ。しかし法門から逸脱する事に気付き、子竜でなく、自分で自分を覆い、小僧だった時の衣免許、袈裟免許、果ては出家した時の初々しい初心の凡夫僧の時の姿に思いを馳せるべきではないだろうか。

日蓮正宗の良き伝燈であった、僧侶が亡くなった時、遺体には木綿の薄墨の法衣を着用させる化儀も、今は亡くなりつつある。

要法寺の影響を受けてから五百年、「貫主本仏思想」と「絵柄綾織紋衣」に何んの疑問も感じないで、名聞名利を刺激される事に、現を抜かして来た。

「貫主本仏思想」の矛盾に気付いたならば、同時に「絵柄綾織紋衣」の矛盾に気付いて貰いたい。

小僧の時から、薄墨白五条の法門は幾度も教示されたが、紋衣が何故必要なのかとの教示は一度も受けた事がないし、書物、資料も眼にした事がない。自分で何んの為に着ているのかも説明出来ない着物を着続ける愚かさよ。法門の裏付けが無いものは所詮根無草といえよう。

おかしいと思うならば、自分だけ着なければ良いのであつて他人が着ている事を兎や角言うなどという方々がいますが、「當家三衣抄」を出すまでもなく、「法衣」は個人の着物でなく法門を表わしたものですから公物であります。たった一人でも法門に叶わないものを着ていけば、全体に関わる事なのであります。

着る者は、何故着るのか主張し、議論する責任があります。

日蓮大聖人様、日興上人様、日目上人様から、

「何を着てるんだ」

「何故着てるんだ」

と尋ねられたと想像し、答えられない事は速やかに

改めるべきだ。

近年、「絵柄綾織紋衣」と、「差貫」（僧侶の階級を色によつて表現する袴）を着ている僧侶を見て、「変だ」という御信者さんが増えて来た。富士の清流に立ち帰ろうと志す正信覚醒運動の産物だと思つて、御信者さんが気付いてくれ、着ても偉く見えなくなれば、着る事が恥かしくなり、着る意味がなくなれば「絵柄綾織紋衣」が裸の王様になる。法門の裏付けが無いのに五百年も着続けられて来たという事は、日蓮大聖人様が、

「名聞名利は今世のかざり」

持妙法華問答抄（全集463P）と示した。いかに、自分を大きく見せよう、偉く見せようとの凡心の誘惑が強大であるかが良く分るのであります。

日蓮正宗の沢山坊さんが着ていても、誰一人として、法門を背景にして、

「どうしても絵柄綾織紋衣を着る必要がある。」と主張する者がいないのであります。という事は、主張する事も出来ない破綻を抱えているにもかかわらず、五百年も着続けて来たということになります。

